２０２０年7月 5日

この頃よく西洋人が日本の文化について言及することが多くなったように思う。日本文化といってもかなり幅が広いので、最近私が感じていることを少しまとめておきたいと考える。工業化された社会が進歩してきた中で、環境破壊という言葉がいろいろなところで聞かれる。西洋人の日本文化の見方は、もとより日本的な自然観を異色なものとして見ている。多分彼らはこの異色ということに、ひかれているのかもしれない。ただ単に異色と見ことにより、近代工業化された文明の行き詰まり感が日本的な自然観の中に突破口を見出せるのではないかと感じ始めたのだと思う。これまで西洋人は西洋的な自然観を土台に現在の文明を進歩させてきた。この西洋的自然観が最近地球環境の破壊を作り出し、強いては文明の行き詰まり感を感じさせているのではないかと思う。では西洋的自然観とはどういうものだろうか？ 私のような日本的自然観とどう違うのだろうかということを、最近考えるようになった。西洋的自然観というものは、特にキリスト教圏で考えられてきた自然観と思われる。こう言うと聖書を信奉している方々には反論があると思われるのだが、西洋的自然観は、まさに聖書の創世記で述べられている天地創造にあるのではないかと思う。エホバ神が最後に人間を創ったとき、なんとおっしゃたかと言うと、アダムに自然を管理するように言われた。まさにこれが西洋人の自然観の基ではないかと思う。この時から自然は人によって管理されるべきものとなったのだ。やや極端だが、自然を人の好きなように使ってもよいということだ。自然は人が管理すべきもの、人の支配下にあるということなのかもしれない。ところが日本では、ほぼアニミズムの世界であり、自然の中で暮らすことにより、自然は恐ろしいもの、このため自然を畏れ多いものとして、自然の中に神を見出してきたと思われる。クマの神様、フクロウの神様、風の神様、雷の神様等、さまざまのものに神様を見出し、畏れ、敬ってきた。いわゆる、日本人にとって自然は共存すべきものとして扱ってきた。決して支配しようと考えたことはなかった。つまりキリスト教精神と違って自然は人間が管理できるものではないと考えてきたことが、西洋人と日本人の違いに表れてきている最大のポイントと思われる。神道は教義もなければエホバのような開祖もいない由縁だろう。自然を支配すべき対象と考えると、残念ながら自然はすべてが人によって理解されるほど単純ではないため、人が自然をいじくりまわすと手痛いしっぺ返しをこうむることになる！西洋人はこうした考え方が西洋文明の行き詰まり感を醸し出していることを最近ようやく判ってきたのだと思う。ただ間違えないでほしいのは日本人が自然と共存することを考えているとはいえ、過去に比べ西洋思想にかぶれてきてしまったため、残念ながらこうした自然観を自覚していない人が多い。必ずしも現在の環境破壊を防止する手段を考えていない。西洋人は、異色な思想ということで、日本を見ているのだと思う。ただ、日本の思想を取り込むことで、現在の文明の行き詰まりを突破できるのではないかと考え始めたのだろう。一方日本人は日本文化について何も考えていない。この分では西洋人が文明の行き詰まり感を先に払拭してしまうのではないかと懸念している。それでもいいのだが、日本人がこれまで習慣的に考えていた自然との共存という考え方をもっと自覚してほしい。今の文明にもっと日本人観を取り入れることができるのは、当の日本人ではないかと思う。神社神道というものはまさにこうした自然との共存を具現化してきたものであり、仏教はこの考え方と近い考え方を持っていたため日本文化に自然と取り入れられたのではないかと思う。逆にキリスト教が日本に浸透しなかったのは、まさにこうした考え方の違いにあるのではないだろうか！キリスト教が今後日本に浸透するためには、こうした根本的な考え方から見直していく必要がありそうだ。最も日本にキリスト教が浸透するときには、仏教と同じで、処世訓のような教義ではなく、人本来の姿はどういうものかという命題から考えていかねばならないと思う。最もそうなると仏教と同じようにいわゆる神様仏様ということになりかねないが、しょせん宗教というものは、似たり寄ったりなものなのだろう。日本人が、よく自分は無宗教ですというのは、基本的な考え方が日本的な自然観に基づいており、宗教の違いなどは、乱暴な言い方だが、どうでもいいと思っている人が大半と思える。どれに重きを置くかなど、単に好みの問題と考えているのだろう。私は**それでいいのだ**と思う。